

暮らしをとらえなおす

レポート
第1回2015.
9.26
[sat]

日野の保育と教育

日野にキャンパスを開設してから50周年を迎える今年度、本学部では原点を見直す意味も込めて「暮らしをとらえなおす」をテーマに全4回の講座を開講します。幼児保育と生活心理学を学ぶ生活文化学科が主催する第1回は、子育てをする環境としての日野の魅力を見つめるとともに、近年増加しているといわれる発達障害児の育成を支援する際のポイントを考えました。また、子どもたちに大人気のパネルシアターを上演しました。

パネルシアター公演

パネルシアターとは、大きなパネルを舞台に見立てて人形劇などを行うもの。本学の学生や卒業生が、可愛い動物たちが登場する「どうぶつ村の広場」や「すてきなお手紙」などの演目を行いました。

演者：実践女子大学 生活文化学科 幼児保育専攻 学生・卒業生



練習を積み重ねた学生たち。皆でリズムを取りながら楽しく上演。



幼児教育の現場で活躍する卒業生も登場。子どもを引き込むテクニックはさすが。

《講演》子どもにとっては、遊びこそ生活文化

自然に恵まれ独自の文化が根づく日野市には、子どもたちが健やかに育つために最適な環境が整っています。教育の本質や大人に求められる役割を見つめるとともに、日野市で行われているさまざまな取り組みをご紹介します。

講師：井口 眞美氏
実践女子大学 生活科学部
生活文化学科 准教授



■大人の枠組みにはめ込まない

子どもには、その年代ならではの感性があります。大人の枠組みにはめ込むことばかりが教育ではありません。私は幼児教育の中で、下記を大切にしたいと考えています。

- 答えは一つではない「オープンエンドな答え」
- 子どもならではの感じ方をつぶさない
- 五感を使った実体験を伴う生活を保証する
- 知識は、興味関心を育むことから
- どれだけ知識があるかより、さまざまな人間関係の中でその子どもらしさ、その子の力が発揮できるか
⇒ 問題解決力の育成

■豊かな自然の中での遊び

日野は豊かな自然に恵まれた地域です。自然の中での遊びには下記のようなメリットがあり、子どもの感性を育み生きる力を伸ばすことにつながります。

- 一人ひとりが自分のしたい遊びを選択できる
- その子なりの、いろいろな遊び方（やり方）が楽しめる
- 五感をフルに使って遊べる
- 納得がいくまでじっくり取り組める
- 仲間と協力して物事が進められる

■子どもを支える大人の役割

子どもの健やかな育成に向けて、大人が特に心がけたいポイントがあります。間違いや失敗を恐れず前向きさを育むためには、「違うでしょ」「ダメ」を連発して子どもを委縮させないことが大切です。また主体性を育むためには、誉めすぎも良くありません。「自分がしたいから」ではなく「お母さんに誉められたい」という過剰適応な態度につながりやすいからです。

■日野市における事例

日野市では公的機関のほか、NPO などさまざまな団体が子どもたちに自然体験の場を提供しています。これらの取り組みに、本学の学生もサポート役として参加させていただいています。



2015年7月に市内の浅川で行われた川遊びの様子。水中を歩いたり、魚をつかまえてみたり。

市内の「せせらぎ農園」さんが支援する、生ゴミに米ぬかボカシを混ぜて土をつくる活動。



■日野の昔話や文化を知る

本学では、地域のむかし話を収集してパネルシアターの作品にする取り組みを行っています。完成した作品は、子どもたちに地域文化を伝える一環として、市内の保育園や幼稚園、児童館などで上演しています。



▲作品の内容は、日野の歴史に精通する地域の方に確認をいただいています。

《講演》 発達障害児と地域で暮らす

発達障害児が暮らしを楽しみ「生きる力」を育むために、周囲はどんな支援ができるのか。児童がツアープランを立てて実行した事例を紹介するとともに、ワークショップで地域の皆様にも外出計画を考えていただきました。

講師：長崎 勤氏
実践女子大学 生活科学部
生活文化学科 教授



■発達障害とは

近年、学習や行動面でさまざまな困難を示す「発達障害」の子どもが増えているといわれます。専門家だけでなく、保育園・幼稚園・小中学校の教員や地域の方々が協力してこうしたお子さん方を支援する体制が求められるようになっていきます。

発達障害は、主に「学習障害 (LD)」「注意欠陥・多動性障害 (ADHD)」「自閉症スペクトラム障害 (ASD)」の3タイプに分類されます(下表参照)。

発達障害の代表的な区分

学習障害 (LD)

全般的な知的発達に遅れはないものの、聞く・話す・読む・書く・計算する・推論する能力のうち、特定のものの習得と使用に著しい困難を示す状態

注意欠陥・多動性障害 (ADHD)

席にじっとしてられない、人の話に口を挟む、ケアレスミスが多く作業が雑など、注意欠陥や多動性を示す状態

自閉症スペクトラム障害 (ASD)

社会性やコミュニケーション能力、想像力に障害がみられる状態。高機能自閉症やアスペルガー障害も含まれる

■「自分」への気づきと、さまざまな問題

発達障害児は小学校高学年位から、「自分はほかの子と違う」と感じるようになります。実際に友達がない場合もあります。同じ時期、典型発達児は「子どもの世界」をつくり、週末などには友達と買い物や映画鑑賞などに出かけるようになります。発達障害児はこうした自立のプロセスを踏むことができません。特に問題なのが、学校のない週末の過ごし方です。また発達障害児はいつも人の支援を受けているため、自分が何のために何をしているのか意味がわからず、学習性無力症となって無気力や引きこもりになりがちです。自信もなく自尊心が低下して、不登校や非行などの問題行動を起こすことがあります。

典型発達児と同様の、「自分でプランを立て、自分の意志で行動して振り返る力」を小学校高学年から中学校位までの時期にどう育むかが、後の社会参加や就労に影響するといわれています。

来場者アンケートから (抜粋)

- 子連れ OK で、気負わず参加できたことがありがたかったです。(女性・30歳代・日野市在住)
- パネルシアターはリズムが良く、パターンがある中に動物の鼻がのびるなどの変化がつけられ、よく工夫されていると思いました。(女性・40歳代・日野市在住)
- 積極的に日野市の魅力を見つけていこうと思いました。教育の本質に触れて良かったです。(男性・40歳代・日野市在住)
- 4歳の自閉症スペクトラムの子どもがいます。聴講して、家族で楽しめる外出法を考えようと思いました。(女性・40歳代・日野市在住)

■事例紹介

「生きる力」を育成する手法の1つが、外出のプランを自分で立て、実行すること。実際の事例として、2つのケースをご紹介します。

事例1：自然+ランチ+ツアー

中学1年生の高機能自閉症児2名(不登校・引きこもり)

- 実行は土曜日。
干潟で野鳥を観察し、大型ショッピングモールで昼食をとる
- 大学生の男性ボランティア1名が同行

事例2：アート+ツアー

中学生の発達障害児2名

- 美術館と大型商店街をめぐる
- 大学生ボランティア2名が同行
- 「美術館で“好きな作品1つ”を選ぶ」「売店でお土産を買う」「大型商店街で家族にお土産を買う」という目標を立てる

どちらも多少のトラブルはあったものの、「楽しかった」「また行きたい」と児童の感想は前向きなものでした。成果も大きく、事例1ではこれをきっかけに児童が登校するようになり、普通高校への進学も果たしています。

学ぶ・生きる意欲を発達障害児に持たせるためには、自分で考え、選び、行動する力を育むことが大切です。またそのための支援活動は、支援する側にとっても楽しいものでなければ効果的ではありません。

■ワークショップ

3グループに分かれ、発達障害児を対象とした「日野周辺地域の自然や文化をともに楽しむ」ツアーのプランを来場者の方々に立てていただきました。

グループ発表では、「市内にある大学の学祭に行く」「多摩動物公園や、近隣にある昭和記念公園などに行く」「市内のお囃子保存会の方々に、公民館で太鼓をレクチャーしてもらう」などのアイデアが出されました。



初対面の方が多い状況ながら、積極的な発言や話し合いが行われました。



最後に、各グループの代表者がディスカッションの結果まとめたツアーの内容を発表しました。